

マントル細胞リンパ腫様の病態を呈した t(11 ; 14)陽性形質細胞白血病の 1 症例

◎奥深 寿美¹⁾、田中 耕輔¹⁾、橋本 秀哉¹⁾
 社会医療法人畿内会 岡波総合病院¹⁾

【はじめに】形質細胞白血病 (PCL) は、希な形質細胞腫瘍の一病型であり、末梢血中の形質細胞 $>2,000/\mu\text{L}$ 、かつ形質細胞比率 $\geq 20\%$ と定義されている。予後不良な疾患であることが知られているが、プロテアソームインヒビターや免疫調整薬、抗 CD38 抗体薬により予後が改善してきており、早期診断が重要である。今回、初診時に典型的な所見を有さず、マントル細胞リンパ腫様の病態を呈した PCL を経験したので報告する。

【症例】74 歳 女性。定期健診時に白血球増多および異常リンパ球の出現を指摘され、当院内科を受診した。貧血症状、四肢および体幹に疼痛を認めなかった。

【初診時検査所見】WBC $12.1 \times 10^3 /\mu\text{L}$ 、RBC $3.76 \times 10^6 /\mu\text{L}$ 、Hb 11.6 g/dL、PLT $130 \times 10^3 /\mu\text{L}$ 、LD 189 U/L、sIL-2R 790 U/mL、CRP 0.08 mg/dL、TP 8.1 g/dL、Alb 4.7 g/dL、Cre 0.78 mg/dL、Ca 10.2 mg/dL、IgA 1536 mg/dL、IgM 18 mg/dL、IgG 343 mg/dL。末梢血血液像では大きさ $12 \sim 20 \mu\text{m}$ 、N/C 比 60~80%、細胞質は好塩基性、核の偏在傾向は明確ではなく、核はくびれを伴い、核形不整、核網

粗剛の成熟傾向を伴うリンパ球様細胞を確認した。FCM で CD45⁻~dim、CD5⁻、CD19⁻、CD20⁻、CD33⁻、CD34⁻、CD56⁻、CD117⁻、CD38⁺ の細胞集団を認めた。骨髓検査で末梢血と同様の異型細胞を 66.2% 認め、それらの細胞は FCM で CD138⁺、細胞質内 λ 鎖⁺ であった。核型は 46, XX, t(11;14)(q13;q32)、FISH 法で IGH/CCD1 融合シグナルが 41% 陽性であった。追加で施行した免疫固定法より血清中 IgA- λ 型の M 蛋白、尿中 λ 型の BJ 蛋白を認めた。これらの検査結果により、PCL と診断した。

【考察・まとめ】本例では自覚症状がなく、IGH/CCD1 融合シグナルが陽性で sIL-2R が高値を示し、形態的にもマントル細胞リンパ腫の白血化と誤診する可能性があった。t(11;14)(q32;q13) 陽多発性骨髓腫では、腫瘍細胞が幼弱な形態を示すことが知られており、形質細胞腫瘍の分化段階を踏まえた表面抗原の理解をもとに臨床検査所見を検討する重要性を示していると考えられる。
 三重県伊賀市上野桑町 1734 岡波総合病院 (0595-23-7401)